

コロナ騒ぎと讀經

愛甲次郎

《一》 コロナ騒ぎ

中國湖北省に端を發せし新型コロナウイルスの騒ぎ收まる所を知らず、遂に小中學校の一斉休校勧告に至る。

小生豫(かね)て便祕の氣味あり。緊急の事態に至ることもあり、救急車にて搬送せられたることも二度に及ぶ。幸ひその後マグミット剤の投用により小康を得たり。されどその處方には事前の診断を要すれば三か月に一度は近所の病院に通ふこととなる。ただその待合室たるや定員二十人ほどにして常に満員、黴菌の巢窟の如き様相を呈す。昨今の状況において最も行くことを欲せざる場所なり。時に家内、マック肺なる奇病を患ひ呼吸困難、酸素ボンベに依存する日常なれば一旦流感罹患せば重篤化を免るること能はず。

一週間ほど前小生當病院に架電、事情説明の上診断を省略せる處方箋の發行を願ひ出づ。擔當者、そは醫師法違反なれば厚生省の許可を要すと答へ、同省の電話番號を告ぐ。紆余曲折の末厚生省醫事課に辿り着きぬ。同課の擔當官小生の要請を聴取り、緊急事態に對處するため目下政府の基本方針を檢討中にして小生の案件もそれにより對處可能なれば今暫く猶豫せられたしと陳ぶ。

一昨日電視の報道にて政府發表の基本方針により電話診断により處方箋の發行可能となれる由を知る。直ちに該病院に聯絡を取りぬ。擔當者電話口には出づれども、當方の問合せに對しては一切承知せずの一點張りなり。現場の當事者意識の缺如にはただ啞然とするのみなりき。

されど更に熟考すれば行政の第一線に前例、規則に忠實なる擔當者を配するはある意味必要なることなり。ただ行政の硬直性を避けんが爲、半世紀も前までは窗口の擔當者の上に健全なる常識を備へたる上級者を配し杓子定規の誹りを受けざるやう配慮せり。然るに半世紀ほど前より立法の方向変化し、行政の執行にあたって自由裁量の餘地を次第に狭め、細部に亘り法により規制する傾向現れたり。「補助金等に係る豫算の執行の適正化に關する法律」はまさにその走りと言ふべし。當時はこれ民主主義の浸透として広く受け入れられたり。

余惟ふに古き行政の慣行は、學徳ともに優れたる人材を集めて官僚となし行政に當らしむる東アジアの政治傳統を踏まえて始めて可能にして、新しき傾向は統治する側と統治せらるる側とを等しと視るアメリカ流の考へによるものなり。この視點よりすれば現在の中國における「共產黨の指導」は前者の立場に立つものにして、アメリカ流とは相容れざるものならん。

(令和二年十月二日受附)

《二》讀經

余戰中戰後の五年間を草深き片田舎に祖父母とともに過ごせり。祖父母淨土眞宗の熱心なる信者なれば家族打ち揃ひて正信偈を誦すること屢なりき。余幼少より正信偈のレコードに親しみたれば行譜にて唱することを得たり。中學生の頃は既に正信偈、和讃ともに諳んぜり。和讃の「光雲無碍如虚空」の一句を特に好み、讀經ここにかかるとき常に精神の高揚を覺えぬ。

長じて、大無量壽經百遍誦すれば他人の痛みを覺ゆるを得と聞く。その眞偽を驗さんとして築地の本願寺に走り、淨土三部經を求む。大無量壽經は三部經の一にして、南無阿彌陀佛を唱ふる者は悉く救ひて極樂淨土に往生せしめんと阿彌陀佛の誓願を説くものなり。讀經百回に及ぶも更に驗なし。

されど讀經、釈迦牟尼佛の請ひに應じて阿彌陀佛姿を現す箇所にかかる度に戰慄にも似たる感動を覺えぬ。やがて譯もなく法華經を讀まばやとの抑へ難き想ひ起こる。

されど二十八品揃ひたる勤行用の經典はいづくにもなし。上野、淺草の書肆、佛具店、池上の本門寺、創價學會、立正佼成會と徒に足を運びぬ。遂にさる佛具屋京都に法華經専門の店あれば問合すべしとて電話番号を告ぐ。幸ひ昭和天皇即位記念の出版にかかる在庫品値二萬圓にてあり。

法華經は大部にして一日平均小一時間かけて二品讀誦するも凡そ二週間を要す。燈明を上げ線香を焚き鉦を鳴らして讀經三昧數年に及びぬ。やがて傍らに今一人誦する者あるを知るに至る。全身氣に充ちて聖なる次元に連なるを覺ゆ。靈的存在の來たりて經を聽くと言ふは強(あなが)ち僞りとも思はれず。

眞の法華經はアストラル次元のいづくかにありて、眼前の法華經はそのコピーに過ぎざるものなるべし。

世に多くの者、キリスト教またはイスラームに比し佛教の近寄り難きはその經典漢文にして難解なるによると言ふ。そは誤りなり。讀經の功德は誦すること自體にあり

て、これにより聖なる次元と連なることにあり。この事實は現實に讀經修行をなせる者にあらざれば容易に理解し難きところなり。

最近歐米より傳はりしものにガイデッド・メデイテーションなるものあり。そは瞑想にあたりヘッドフォンを用ゐて觀想のガイダンスを受くるものなり。勿論瞑想の座にて師口頭にて導くこと可能なれど瞑想状態の安定を保つにはかかる仕組みもまた良しとすべし。往時科學技術のなかりしとき寺院にてかかる仕組みに代はるものとして用ゐられたるは經典なりき。經典を暗記しその導きに從ひて觀想を行はば極めて高き境地に進むことを得。寺にて小僧讀經に明け暮れたるは故なきに非ず。余體調を崩し法華經讀むことを歇めて久し。その後チベット密教の讀經を以つて毎日の勤行に代ふ。

意味は深く解せざれども一向に氣にせず。氣の全身に充つれば心身の淨化進むこと疑ひなし。その後體調の回復を得て讀經を再開するを得たり。ただ十年に及ぶ怠りは輕視し難く、聲量は落ち、脚は萎えて正座に堪へず。ただひたすら勤めて再びかの聖なる靈域に觸れんとするのみなり。

(令和二年十月六日受附)